

3-3

校長の家庭学習充実に向けた 校長の経営力について

Benesse 教育研究開発センター主任研究員 田中 勇作

はじめに

本章第1節では、「『教師の家庭学習指導力』が高いほど、その教師が担当する子どもの『家庭学習力』は高い」という作業仮説1について、また、同第2節では「『保護者の家庭学習支援力』が高いほど、その子どもの『家庭学習力』は高い」という作業仮説2について検証してきた。

本節では、そうした「教師の指導力」や「家庭の教育力」を最大化する機能として「校長の経営力」をとらえ、家庭学習力の充実に関わる校長の取り組みや働きかけの状況を通して、「『家庭学習充実に関する学校の経営力』が高いほど、その学校における『教師の家庭学習指導力』や『保護者の家庭学習支援力』は高い」という作業仮説4ならびに作業仮説5について探っていくこととする。

1 校長の家庭学習充実に向けての取り組み状況と子どもの教科学力および家庭学習力との関係

さて、第2章6節でも述べられたように、先行する「基本調査2004」では、校長の学力向上に向けた4つの観点（Management：基本方針の設定と共通理解の促進、Organization：組織・体制の強化と充実、Resource：教育資源の充実と有効活用、Education：教育課程の整備・充実）からの取り組みが「教師の指導力」や「家庭の教育力」の向上を促し、総合教育力向上における要となっていることを検証した。今回の「基本調査2008」においても、同じ枠組みを踏まえ、家庭学習充実に向けての校長の取り組みと教師の家庭学習指導力や保護者の家庭学習支援力の関係を見ていく。その前に、まず家庭学習充実に向けての校長の取り組みの度合いと子どもたちの教科学力や家庭学習力との関係について確認してみたい。

図表3-3-1は、第2章6節で紹介した家庭学習充実に向けた校長の取り組みに関する調査項目（Management：基本方針の設定と共通理解の促進）に対する回答状況によって、小学校校長を肯定群（「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答）と否定群（「どちらかといえばあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答）に分け、それぞれの群に属する各校長が勤務する学校における子どもたちの教科学力スコ

アならびに家庭学習力スコアを比較したものである。なお、両スコアの算出の仕方、図表の見方は本章第1節で示した図表3-1-3に準じている。また、ここでもクロス集計の単位を変更したため、「基本調査2008」中間報告書の図表の数値とは異なっていることを付記しておく。

さて、図表3-3-1に示すように、肯定群>否定群となる項目は、教科学力スコアではその差異が大きいものから順に「保護者が家庭で果たすべきことと学校が取り組むべきこととを両者の話し合いを通して互いの約束として共通理解している（問6-4）」「教育委員会に、効果的な家庭学習・宿題の指導ノウハウについての情報提供や学校間交流の促進を求めている（問6-11）」「学校の教育目標達成のために基本方針の中に家庭学習の果たす役割を明確に位置づけている（問6-2）」をはじめ15項目中9項目となっている。また、家庭学習力スコアに関しても項目は異なるが同じく9項目で肯定群の方がスコアが高い。教科学力スコアおよび家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となる項目は図表中の網掛けで示した6項目となり、校長のこうした家庭学習充実に向けての取り組みの違いが子どもたちの教科学力や家庭学習力の差異として現れていると考えられる。

図表3-3-1 校長の家庭学習充実に関する基本方針の設定と共通理解促進に関する取り組み(M)と子どもの教科学力・家庭学習力の関係(小学校)

設問の カテゴリー	項目 番号	項目内容	校長 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
(M)	推進基盤 作り	問6-1 家庭学習の推進を担当する校内組織や分掌を設けている。	肯定	69.7	-2.2		2.79	-0.01	
			否定	71.8			2.80		
		問6-2 学校の教育目標達成のために基本方針の中に家庭学習の果たす役割を明確に位置づけている。	肯定	72.0	2.6		2.82	0.06	
			否定	69.4			2.76		
		問6-3 学校と家庭・地域の教育の役割分担を保護者や地域代表者等との協議を通して設定している。	肯定	72.3	1.8		2.82	0.04	
			否定	70.5			2.78		
		問6-4 保護者が家庭で果たすべきことと学校が取り組むべきこととを両者の話し合いを通して互いの約束として共通理解している。	肯定	74.0	4.7	**	2.86	0.11	*
	否定		69.4	2.75					
	問6-5 家庭学習や宿題について、子どもや保護者の意見・悩みや意識を調査する機会を設けている。	肯定	71.4	0.2		2.79	-0.01		
		否定	71.1			2.80			
	問6-6 放課後等に子どもの宿題をサポートする要員を確保している。	肯定	71.1	0.1		2.84	0.05		
		否定	71.0			2.79			
	問6-15 家庭学習の充実に向けた取り組みも学校評価の対象としている。	肯定	69.2	-3.1	+	2.81	0.02		
		否定	72.3			2.79			
教師の指 導力向上 推進	問6-7 学年経営計画や学級経営計画に対して、家庭学習の推進上の改善点の具体的なアドバイスをを行っている。	肯定	71.6	1.2		2.83	0.06		
		否定	70.4			2.77			
	問6-8 教員の年間指導計画やシラバスにおいて、各単元に対応する家庭学習や宿題の内容を具体的に記入させている。	肯定	71.4	0.4		2.84	0.05		
		否定	70.9			2.79			
	問6-9 校内の研究授業などに参加して、授業改善のための宿題の効果的な活用について具体的に助言している。	肯定	69.5	-2.7	+	2.81	0.02		
		否定	72.2			2.79			
	問6-10 家庭学習の指導の仕方や効果的な宿題の出し方について教員各自の工夫や悩みが交換され共有化される機会を設けている。	肯定	70.7	-0.6		2.78	-0.04		
否定		71.3	2.82						
問6-11 教育委員会に、効果的な家庭学習・宿題の指導ノウハウについての情報提供や学校間交流の促進を求めている。	肯定	74.3	3.6	*	2.78	-0.02			
	否定	70.7			2.80				
問6-14 家庭学習・宿題を効果的に活用した授業改善の研究を推進している。	肯定	67.9	-3.8	+	2.81	0.01			
	否定	71.7			2.80				
教育資源 の有効 活用	問6-12 公立の図書館や博物館などの教育・文化施設の家庭学習での活用を促している。	肯定	71.0	-0.1		2.80	0.00		
		否定	71.0			2.80			
家庭の教 育力向上 支援	問6-13 家庭の教育力充実のために学校としての支援の取り組みを積極的に展開している。	肯定	71.1	0.2		2.78	-0.04		
		否定	70.9			2.82			

注) 表中「検定」欄の「**」は危険率1%水準で、「*」は同じく5%水準で有意差が認められることを示す。なお、「+」は同じく参考として10%水準で有意差が認められるものにつけている。また、「NA」は一方のサンプル数が3件未満のため検定ができないことを示す。網掛けは、教科学力および家庭学習力のスコアがともに肯定群>否定群となる項目を示している。(以下同様)

しかし、具体的な項目内容を見てみると、こうした校長の取り組みは主に学校経営に関わる基本的な方針や在り方に関するものであり、働きかけの対象は教師や保護者、あるいは教育委員会であることから、校長の取り組みが直接子どもたちの教科学力や家庭学習力に影響を及ぼしているとは考えにくい。

本章第1、2節で見てきたように、子どもの教科学力や家庭学習力は、教師の指導力や保護者の家庭学習支援力に大きく左右され、さらに両者の連携が重要であることが確認できた。しかし、そうした教師の指導力や保護者の支援力はバラつきが大きいことも事実である。網掛けをした項目を見ると、個々の教師の指導力を向上させるとともに、保護者を巻き込むかたちで、学校全体としての指導力の向上をめざし、基本方針を設定し、その共通理解や実践の仕組み(基盤)作りを推進していくことの重要性がうかがえる。すなわち、校長のそうした取り組みや働きかけが教師の指導力や保護者の支援力を向上させ、それが子どもたちの教科学力や家庭学習力の育成へと間接的につながっており、校長の家庭学習充実に向けての基本的な方針設定やその遂行に向けての仕組み作りへの取り組みの度合いが子どもたちの教科学力や家庭学習力の違いとして現れていると推察できる。

ただ、第2章6節で見たように、こうした取り組みに対して「とてもあてはまる」と回答した校長の割合は1割に満たないのが現状であり、全体としてさらなる積極的な取り組みの余地が残されているといえよう。

次に、図表3-3-2には、図表3-3-1でみた家庭学習充実に向けての基本方針や推進基盤を踏まえ、「組織・体制の強化と充実(O)」「教育資源の充実と有効活用(R)」「教育課程の整備・充実(E)」の各領域に対して、具体的な方策として校長が教師や保護者に対して、どのような指示や働きかけを行っているかという観点から、図表3-3-1に準ずるかたちで、それぞれの項目への肯定・否定の状況と子どもの教科学力・家庭学習力との関係を示した。

子どもの教科学力および家庭学習力スコアがともに肯定群>否定群となる網掛けで示した項目は、16項目中7項目となる。

肯定群と否定群の教科学力スコアの差異が大きい項目についてみると、「入学時から最終学年を通して家庭学習を含めて学校として付けさせたい力を構想し学校全体で共有する(問7-2)」「家庭学習・宿題の成果の評価規準・判断基準を作成する(問7-15)」「発達段階に応じて基本的生活習慣・体験的活動・探究的課題等も含めた宿題を体系的に構想する(問7-10)」といった項目となっており、そうした校長の働きかけが奏効していることを示唆している。

ただ第2章6節の図表2-6-1に示されたように、項目全体を見ても「とてもあてはまる」とする校長の割合は問7-2等の2、3項目を除き、いずれも5%未満となり、家庭学習充実に向けた校長の具体的な働きかけについても多くの学校ではまだ積極的にはなされていない現状がうかがえる。前述したような取り組みは一部の先導的な学校のみでなされているかなりハードルの高いものといえる。一方、「入学時から最終学年を通して家庭学習を含めて学校として付けさせたい力を構想し学校全体で共有する(問7-2)」では、1割の校長が積極的な働きかけをしており、まずはこうした基本的かつ根本的なステップでの取り組みから着実に推進していくことが現実的かつ効果的であることを示唆している。

なお、図表3-3-3および図表3-3-4には、同様に中学校校長における取り組みと子どもの教科学力、家庭学習力の関係を示した。小学校に比べると、肯定群と否定群間における子どもの教科学力や家庭学習力スコアに有意な差異を示す項目が多く見受けられる。

さて、図表3-3-1および図表3-3-3に示されたように、「基本方針の設定と共通理解の促進(M)」における取り組みに関して肯定群>否定群となる項目は小・中学校ともに少ない。とくに、教科学力については、逆に否定群の方が有意に高くなる項目がとりわけ「教師の指導力向上推進」に関する領域で見受けられる。言い換えると、教師の指導力向上により積極的に取り組んでいるとする校長の学校で子どもの教科学力が低いということになる。ただ、常識的に考えるとこうした校長の積極的な取り組みが、子どもたちの教科学力を低下させているとは解釈しがたい。

図表3-3-2 校長の家庭学習充実に関する具体的な働きかけ(O・R・E)と子どもの教科学力・家庭学習力の関係(小学校)

設問の カテゴリー	項目 番号	項目 内容	校長 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
(O) 組織・体制の強化と充実	校内組織の連携・協働	問7-1 教科ごと、学年ごとに宿題の統一的な出題方針(内容・量・授業での活用方法)やフォロー指導・評価方法を設定する。	肯定	70.2	-0.9		2.84	0.06	
			否定	71.1			2.78		
		問7-2 入学時から最終学年を通して家庭学習を含めて学校として付けさせたい力を構想し学校全体で共有する。	肯定	72.4	3.2	+	2.81	0.02	
			否定	69.2			2.79		
	問7-3 教職員が連携して宿題のフォロー指導が確実にできる体制を確立する。	肯定	70.8	0.1		2.79	-0.01		
		否定	70.7			2.80			
	問7-4 教科ごと、学年ごとの家庭学習や宿題の進め方をわかりやすい「手引き」にして子どもに配付する。	肯定	70.7	-0.1		2.80	0.00		
		否定	70.8			2.80			
	異校種間の連携	問7-5 小中学校の教員間で、家庭学習の進め方や宿題の出し方や内容に関する意見交換を行う。	肯定	71.9	1.4		2.86	0.07	
			否定	70.5			2.79		
		問7-6 小中学校の教員間で義務教育期間を通じた家庭学習・宿題の内容やレベルなどについて協議する場を設ける。	肯定	69.8	-1.1		2.77	-0.03	
			否定	70.9			2.80		
問7-7 「学校だより」等を通じて、保護者に対して家庭学習・宿題の学校の方針を説明し、協力を要請する。	肯定	70.6	-0.4		2.80	0.01			
	否定	71.0			2.79				
実(R)と有効活用	指導ノウハウの共有	問7-8 効果的な宿題の教材やその出題の仕方、指導法を共有して活用する。	肯定	71.9	1.7		2.83	0.05	
			否定	70.2			2.78		
(E) 教育課程の整備・充実	ICTの活用	問7-9 宿題の出題や、その指導にコンピュータを積極的に活用する。	肯定	67.3	-4.1	+	2.80	0.00	
			否定	71.4			2.80		
	総合的なカリキュラムの編成	問7-10 発達段階に応じて基本的な生活習慣・体験的活動・探究的課題等も含めた宿題を体系的に構想する。	肯定	72.6	2.5		2.85	0.07	
			否定	70.1			2.78		
	問7-11 学校の教育目標達成のために、家庭学習・宿題も考慮したカリキュラムを編成する。	肯定	71.6	1.1		2.85	0.07		
		否定	70.5			2.78			
	授業改善の方針と実践	問7-12 グループで取り組む宿題の出題等、宿題を通じた学び合いを授業に計画的に導入する。	肯定	70.5	-0.3		2.80	0.00	
			否定	70.8			2.80		
		問7-13 宿題においても個に応じた出題を工夫し、一斉の出題と使い分ける。	肯定	69.6	-1.7		2.80	0.00	
			否定	71.5			2.80		
		問7-14 習得・習熟、活用などのそれぞれの段階において効果的な宿題を工夫・活用し授業改善につなげる。	肯定	71.0	0.4		2.84	0.07	+
			否定	70.6			2.77		
問7-15 家庭学習・宿題の成果の評価規準・判断基準を作成する。	肯定	73.4	2.8		2.99	0.20	*		
	否定	70.6			2.79				
問7-16 家庭学習・宿題の指導についてもカリキュラム評価の対象とする。	肯定	68.3	-2.8		2.93	0.14	*		
	否定	71.1			2.79				

見方を変えて、「課題を抱えるいくつかの中学校においては、校長の強いリーダーシップを中心とした教師の指導力向上や保護者の家庭学習支援力の向上の動きが始まっているが、その成果はま

だ子どもたちの教科学力(や家庭学習力)には明確には現れていない」と考えるとこの現象についてある程度の説明はつくが、この点については後ほど改めて検討したい。

図表 3-3-3 校長の家庭学習充実に関する基本方針の設定と共通理解促進に関する取り組み(M)と子どもの教科学力・家庭学習力の関係(中学校)

設問の カテゴリ	項目 番号	項目 内容	校長 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
(M) 基本方針の設定と共通理解の促進	問6-1	家庭学習の推進を担当する校内組織や分掌を設けている。	肯定	67.8	1.8		2.49	-0.03	
			否定	66.0			2.52		
	問6-2	学校の教育目標達成のために基本方針の中に家庭学習の果たす役割を明確に位置づけている。	肯定	65.9	-1.2		2.52	0.02	
			否定	67.1			2.50		
	問6-3	学校と家庭・地域の教育の役割分担を保護者や地域代表者等との協議を通して設定している。	肯定	68.1	2.4		2.50	-0.01	
			否定	65.7			2.51		
	問6-4	保護者が家庭で果たすべきことと学校が取り組むべきこととを両者の話し合いを通して互いの約束として共通理解している。	肯定	68.6	3.0		2.53	0.03	
			否定	65.6			2.50		
	問6-5	家庭学習や宿題について、子どもや保護者の意見・悩みや意識を調査する機会を設けている。	肯定	66.7	0.3		2.51	0.00	
			否定	66.4			2.51		
	問6-6	放課後等に子どもの宿題をサポートする要員を確保している。	肯定	65.8	-0.9		2.47	-0.04	
			否定	66.7			2.51		
	問6-15	家庭学習の充実に向けた取り組みも学校評価の対象としている。	肯定	64.7	-4.4	+	2.53	0.05	
			否定	69.1			2.48		
教師の指導力向上 推進	問6-7	学年経営計画や学級経営計画に対して、家庭学習の推進上の改善点の具体的なアドバイスを行っている。	肯定	67.5	1.5		2.51	0.01	
			否定	66.0			2.51		
	問6-8	教員の年間指導計画やシラバスにおいて、各単元に対応する家庭学習や宿題の内容を具体的に記入させている。	肯定	72.8	7.3	*	2.62	0.13	*
			否定	65.5			2.49		
	問6-9	校内の研究授業などに参加して、授業改善のための宿題の効果的な活用について具体的に助言している。	肯定	68.3	3.6	+	2.55	0.09	*
			否定	64.7			2.46		
	問6-10	家庭学習の指導の仕方や効果的な宿題の出し方について教員各自の工夫や悩みが交換され共有化される機会を設けている。	肯定	67.0	0.8		2.52	0.01	
否定			66.2	2.50					
問6-11	教育委員会に、効果的な家庭学習・宿題の指導ノウハウについての情報提供や学校間交流の促進を求めている。	肯定	63.3	-3.9	*	2.50	-0.01		
		否定	67.2			2.51			
問6-14	家庭学習・宿題を効果的に活用した授業改善の研究を推進している。	肯定	63.1	-6.1	**	2.50	-0.01		
		否定	69.2			2.51			
教育資源の有効活用	問6-12	公立の図書館や博物館などの教育・文化施設の家庭学習での活用を促している。	肯定	64.9	-1.9		2.54	0.03	
			否定	66.8			2.50		
家庭の教育力向上支援	問6-13	家庭の教育力充実のために学校としての支援の取り組みを積極的に展開している。	肯定	64.6	-3.9	+	2.51	0.00	
			否定	68.4			2.51		

図表3-3-4 校長の家庭学習充実に関する具体的な働きかけ(O・R・E)と子どもの教科学力・家庭学習力の関係(中学校)

設問の カテゴリー	項目 番号	項目内容	校長 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
(O) 組織・体制の強化と充実	校内組織の連携・協働	問7-1 教科ごと、学年ごとに宿題の統一的な出題方針(内容・量・授業での活用方法)やフォロー指導・評価方法を設定する。	肯定	66.9	0.6		2.54	0.06	+
			否定	66.3			2.48		
		問7-2 入学時から最終学年を通して家庭学習を含めて学校として付けさせたい力を構想し学校全体で共有する。	肯定	67.6	1.9		2.52	0.02	
			否定	65.7			2.50		
	問7-3 教職員が連携して宿題のフォロー指導が確実にできる体制を確立する。	肯定	67.9	1.8		2.50	-0.01		
		否定	66.1			2.51			
	問7-4 教科ごと、学年ごとの家庭学習や宿題の進め方をわかりやすい「手引き」にして子どもに配付する。	肯定	66.1	-0.9		2.51	0.00		
		否定	66.9			2.51			
	異校種間の連携	問7-5 小中学校の教員間で、家庭学習の進め方や宿題の出し方や内容に関する意見交換を行う。	肯定	63.0	-4.3	*	2.47	-0.05	
			否定	67.3			2.52		
		問7-6 小中学校の教員間で義務教育期間を通じた家庭学習・宿題の内容やレベルなどについて協議する場を設ける。	肯定	64.8	-2.2		2.48	-0.03	
			否定	67.0			2.52		
問7-7 「学校だより」等を通じて、保護者に対して家庭学習・宿題の学校の方針を説明し、協力を要請する。	肯定	66.0	-2.0		2.49	-0.07	+		
	否定	68.0			2.56				
実(R)と有効活用	指導ノウハウの共有	問7-8 効果的な宿題の教材やその出題の仕方、指導法を共有して活用する。	肯定	66.6	0.8		2.56	0.08	*
			否定	65.8			2.48		
ICTの活用	問7-9 宿題の出題や、その指導にコンピュータを積極的に活用する。	肯定	67.2	0.6	NA	2.56	0.05	NA	
		否定	66.6			2.51			
(E) 教育課程の整備・充実	問7-10 発達段階に応じて基本的な生活習慣・体験的活動・探究的課題等も含めた宿題を体系的に構想する。	肯定	70.3	5.4	*	2.53	0.03		
		否定	64.9			2.50			
	問7-11 学校の教育目標達成のために、家庭学習・宿題も考慮したカリキュラムを編成する。	肯定	69.9	5.0	*	2.55	0.07	+	
		否定	64.9			2.49			
	問7-12 グループで取り組む宿題の出題等、宿題を通じた学び合いを授業に計画的に導入する。	肯定	69.0	3.2		2.57	0.08	+	
		否定	65.8			2.49			
	問7-13 宿題においても個に応じた出題を工夫し、一斉の出題と使い分ける。	肯定	65.8	-1.1		2.47	-0.05		
		否定	66.9			2.53			
	問7-14 習得・習熟、活用などのそれぞれの段階において効果的な宿題を工夫・活用し授業改善につなげる。	肯定	69.4	5.1	*	2.55	0.08	*	
		否定	64.3			2.48			
問7-15 家庭学習・宿題の成果の評価規準・判断基準を作成する。	肯定	82.5	16.4	NA	2.66	0.15	NA		
	否定	66.1			2.51				
問7-16 家庭学習・宿題の指導についてもカリキュラム評価の対象とする。	肯定	67.7	1.3		2.60	0.10	*		
	否定	66.4			2.50				

2

「校長の家庭学習充実に向けての取り組み」のカテゴリースコアと
子どもの教科学力および家庭学習力との関係

1 校長の家庭学習充実に関する取り組みに関する項目の再カテゴリー化について

以上見てきたように、校長の家庭学習充実に向けての取り組みや働きかけの度合いによって、子どもの教科学力や家庭学習力に違いが見られた。もちろん、校長のこうした取り組みや働きかけが直接的に子どもの教科学力や家庭学習力に影響を及ぼすのではなく、教師の指導力や保護者の教育力の向上を介して間接的になされていることは明らかであろう。ただ、こうした校長の家庭学習充実に向けての取り組みや働きかけは複数の領域や観点にわたり、その機能や効用も異なっている。また、前述したように学校現場における取り組み度合いも項目によって異なり、学校の実態や抱える課題によっても優先すべき取り組みが異なってくるといえる。

本章第1節でも述べたように、こうした取り組みの効用を考えるに際しては、全ての項目についての組み合わせによる影響を分析したり、取り組み間の影響を考慮したりすることは現実的ではない。そこで、本章第1節に準ずるかたちで、今回の調査で設定した校長の家庭学習充実に関する31項目(問6：15項目、問7：16項目)に対する小・中学校校長の回答状況を因子分析にかけ、校長の家庭学習充実に向けての取り組みを「校長の家庭学習充実に関する経営力」として操作的に定義するためのカテゴリー化を改めて行った。図表3-3-5および図表3-3-6は、その結果を示したものである。

図表3-3-5 因子分析による「校長の家庭学習充実に関する項目」の再カテゴリー化(問6)

抽出された因子	項目内容	当初設定したカテゴリー・下位領域
因子1 校長の 経営手腕 (M3)	6-8.教員の年間指導計画やシラバスにおいて、各単元に対応する家庭学習や宿題の内容を具体的に記入させている。	M-② 教師の指導力向上推進
	6-11.教育委員会に、効果的な家庭学習・宿題の指導ノウハウについての情報提供や学校間交流の促進を求めている。	M-② 教師の指導力向上推進
	6-6.放課後等に子どもの宿題をサポートする要員を確保している。	M-① 推進基盤づくり
	6-12.公立の図書館や博物館などの教育・文化施設の家庭学習での活用を促している。	M-③ 教育資源の有効活用
因子2 推進の 基盤作り (M1)	6-2.学校の教育目標達成のために基本方針の中に家庭学習の果たす役割を明確に位置づけている	M-① 推進基盤づくり
	6-1.家庭学習の推進を担当する校内組織や分掌を設けている	M-① 推進基盤づくり
	6-7.学年経営計画や学級経営計画に対して、家庭学習の推進上の改善点の具体的なアドバイスを行っている。	M-② 教師の指導力向上推進
因子3 家庭との 連携 (M2)	6-4.保護者が家庭で果たすべきことと学校が取り組むべきことを両者の話し合いを通して互いの約束として共通理解している。	M-① 推進基盤づくり
	6-3.学校と家庭・地域の教育の役割分担を保護者や地域代表者等との協議を通して設定している。	M-① 推進基盤づくり
	6-10.家庭学習の指導の仕方や効果的な宿題の出し方について教員各自の工夫や悩みが交換され共有化される機会を設けている。	M-② 教師の指導力向上推進
	6-5.家庭学習や宿題について、子どもや保護者の意見・悩みや意識を調査する機会を設けている。	M-① 推進基盤づくり
因子4 授業改善 の推進 (M4)	6-14.家庭学習・宿題を効果的に活用した授業改善の研究を推進している。	M-② 教師の指導力向上推進
	6-15.家庭学習の充実に向けた取り組みも学校評価の対象としている。	M-① 推進基盤づくり
	6-9.校内の研究授業などに参加して、授業改善のための宿題の効果的な活用について具体的に助言している。	M-② 教師の指導力向上推進
	6-13.家庭の教育力充実のために学校としての支援の取り組みを積極的に展開している。	M-④ 家庭の教育力向上支援

図表3-3-6 因子分析による「校長の家庭学習充実に関する項目」の再カテゴリー化（問7）

抽出された因子	項目内容	当初設定したカテゴリー・下位領域
因子1 校内組織 の連携・協働 (O1)	7-3.教職員が連携して宿題のフォロー指導が確実に実行する体制を確立する。	O-① 校内組織の連携・協働
	7-1.教科ごと、学年ごとに宿題の統一的な出題方針(内容・量・授業での活用方法)やフォロー指導・評価方法を設定する。	O-① 校内組織の連携・協働
	7-4.教科ごと、学年ごとの家庭学習や宿題の進め方をわかりやすい「手引き」にして子どもに配付する。	O-① 校内組織の連携・協働
	7-8.効果的な宿題の教材やその出題の仕方、指導法を共有して活用する。	R-① 指導ノウハウの共有
	7-2.入学時から最終学年を通して家庭学習を含めて学校として付けさせたい力を構想し学校全体で共有する。	O-① 校内組織の連携・協働
	7-7.「学校だより」等を通じて、保護者に対して家庭学習・宿題の学校の方針を説明し、協力を要請する。	O-③ 保護者との連携
因子2 総合的な カリキュラム 編成 (E1)	7-16.家庭学習・宿題の指導についてもカリキュラム評価の対象とする。	E-② 授業改善の方針と実践
	7-11.学校の教育目標達成のために、家庭学習・宿題も考慮したカリキュラムを編成する。	E-① 総合的なカリキュラム編成
	7-15.家庭学習・宿題の成果の評価基準・判断基準を作成する。	E-② 授業改善の方針と実践
	7-9.宿題の出題や、その指導にコンピュータを積極的に活用する。	R-② ICTの活用
	7-12.グループで取り組む宿題の出題等、宿題を通した学び合いを授業に計画的に導入する。	E-② 授業改善の方針と実践
因子3 宿題を絡めた 授業改善 (E2)	7-14.習得、習熟、活用などのそれぞれの段階において効果的な宿題を工夫・活用し授業改善につなげる。	E-② 授業改善の方針と実践
	7-13.宿題においても個に応じた出題を工夫し、一斉の出題と使い分ける。	E-② 授業改善の方針と実践
	7-10.発達段階に応じて基本的な生活習慣・体験的活動・探究的課題等も含めた宿題を体系的に構想する。	E-① 総合的なカリキュラム編成
因子4 小・中学校間 の連携 (O2)	7-6.小中学校の教員間で義務教育期間を通じた家庭学習・宿題の内容やレベルなどについて協議する場を設ける。	O-② 異校種間の連携
	7-5.小中学校の教員間で、家庭学習の進め方や宿題の出し方や内容に関する意見交換を行う。	O-② 異校種間の連携

詳細については割愛するが、校長調査における問6および問7の計31項目に対する因子分析の結果、問6の15項目は一つの因子として抽出され、問7の16項目とは明らかに異なる因子となっていることが確認できた。そこで、問6の15項目を改めて因子分析した結果、図表3-3-5に示すように「校長の経営手腕(第1因子)」「推進の基盤作り(第2因子)」「家庭との連携(第3因子)」および「授業改善の推進(第4因子)」ともいえる4つの因子が抽出された。ここでは、校長の家庭学習充実に関するMOREモデルのMに相当する「基本方針の設定と共通理解の促進」のカテゴリーをこれら4つの因子(下位領域)からなるものと操作的に定義する。

また、問7の16項目については図表3-3-6に示すように「校内組織の連携・協働(第1因子)」「総合的なカリキュラムの編成(第2因子)」「宿題を絡めた授業改善(第3因子)」および「小・

中学校間の連携(第4因子)」といえる4つの因子を抽出することができた。なお、当初設定したMOREモデルとの対応で見ると、第1、4因子は「組織・体制の強化と充実(O)」と、第2、3因子は「教育課程の整備・充実(E)」とそれぞれ対応する。ただ、「教育資源の充実と有効活用(R)」として設定した2項目のうち「効果的な宿題の教材やその出題の仕方、指導法を共有して活用する(問7-8)」は第1因子として、また「宿題の出題や、その指導にコンピュータを積極的に活用する(問7-9)」は第2因子として分類され、「教育資源の充実と有効活用(R)」に対応する因子は抽出されなかった。

以下、このようにして再構成した8つのカテゴリーとそれぞれの下位領域項目(計31項目)に対する校長の回答について、「とてもあてはまる：4」「どちらかといえばあてはまる：3」「どちらかといえばあてはまらない：2」「まったくあて

はまらない：1」としてスコア化し、各校長について31項目の合計スコアを算出したものを、校長の「家庭学習充実の経営力(家庭学習MORE)総合スコア」として操作的に定義する。また、各

カテゴリーに属する下位領域項目についても同様にスコア化し、各カテゴリーにおける該当項目の合計スコアを「カテゴリースコア」とする。

2 家庭学習充実に関する校長の経営力のカテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力の関係について

前述の方法によって算出した校長の「家庭学習充実の経営力」の各カテゴリースコアおよび総合スコアを元に、本章第1節に準ずる形で、小学校校長を上位群・中位群・下位群の3群に分け、各群に属する校長が勤務する学校における子どもたちの教科学力スコアおよび家庭学習力スコア(いずれも偏差値換算)の平均を算出した結果を図表3-3-7に示した。

なお、2008年11月に刊行した「基本調査2008」中間報告書に示した「家庭学習の充実の取り組み

のカテゴリー別スコアと子どもの教科学力との関係」の図表と数値が異なっているが、中間報告の図表では教科学力との間に正の相関がある項目のみを抽出し、当初のカテゴリーモデルに沿って集計している一方、本報告書では前掲の図表3-3-5および図表3-3-6に示した再構成化した8つのカテゴリーをもとに31項目全てによるカテゴリースコアを算出し直すなど集計単位を変更したことによることを付記しておく。

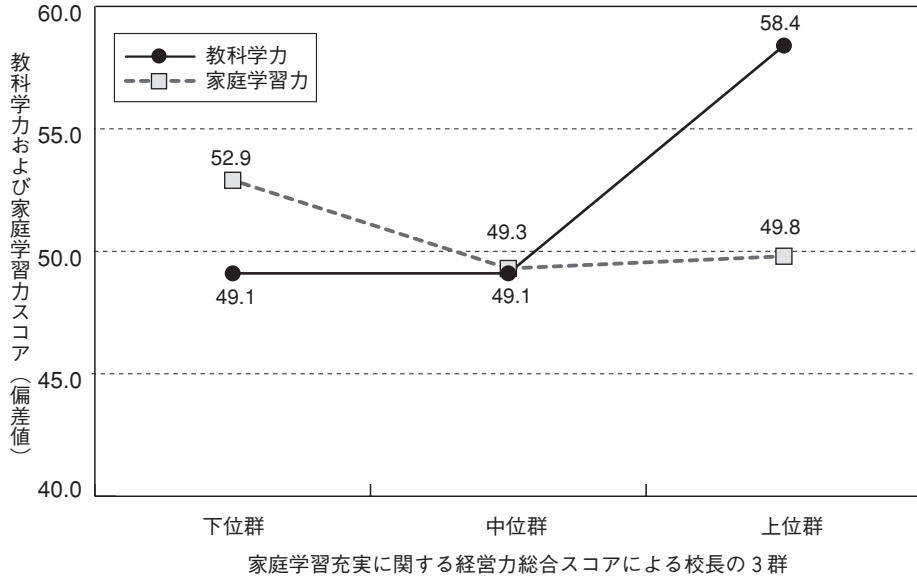
図表3-3-7 「家庭学習充実の経営力」のカテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)

「家庭学習充実の経営力」 のカテゴリー	校長群	家庭学習 MORE	家庭学習 MORE	家庭学習 MORE	上位-下位	検定
	子どもスコア	下位群	中位群	上位群		
1. 家庭学習推進の基盤 構築(M1)	教科学力	40.6	51.9	49.6	9.0	+
	家庭学習力	49.0	49.5	51.9	2.9	
2. 家庭との連携(M2)	教科学力	41.9	50.5	53.2	11.3	+
	家庭学習力	49.9	50.4	49.0	-1.0	
3. 校長の手腕(M3)	教科学力	46.5	51.3	50.5	4.0	
	家庭学習力	51.2	48.6	56.6	5.4	
4. 授業改善の推進 (M4)	教科学力	46.2	50.8	50.1	3.9	
	家庭学習力	54.5	47.8	60.2	5.8	
5. 校内組織の連携・協働 (O1)	教科学力	47.7	49.7	55.1	7.4	+
	家庭学習力	50.7	49.9	49.7	-1.0	
6. 小・中学校間の連携 (O2)	教科学力	47.7	51.2	50.6	2.9	
	家庭学習力	54.3	47.5	50.6	-3.7	
7. 総合的なカリキュラム 編成(E1)	教科学力	48.9	51.1	47.7	-1.3	
	家庭学習力	53.0	49.8	47.0	-5.9	
8. 宿題を絡めた授業改善 の遂行(E2)	教科学力	43.7	50.1	59.8	16.0	*
	家庭学習力	52.3	49.3	52.0	-0.4	
家庭学習充実への経営力 総合スコア	教科学力	49.1	49.1	58.4	9.2	+
	家庭学習力	52.9	49.3	49.8	-3.2	

また、**図表 3-3-8**には、小学校校長の家庭学習充実の経営力総合スコアと子どもの教科学力

および家庭学習力との関係 (**図表 3-3-7**の最下部)をグラフで示した。

図表 3-3-8 「家庭学習充実の経営力」総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係 (小学校)

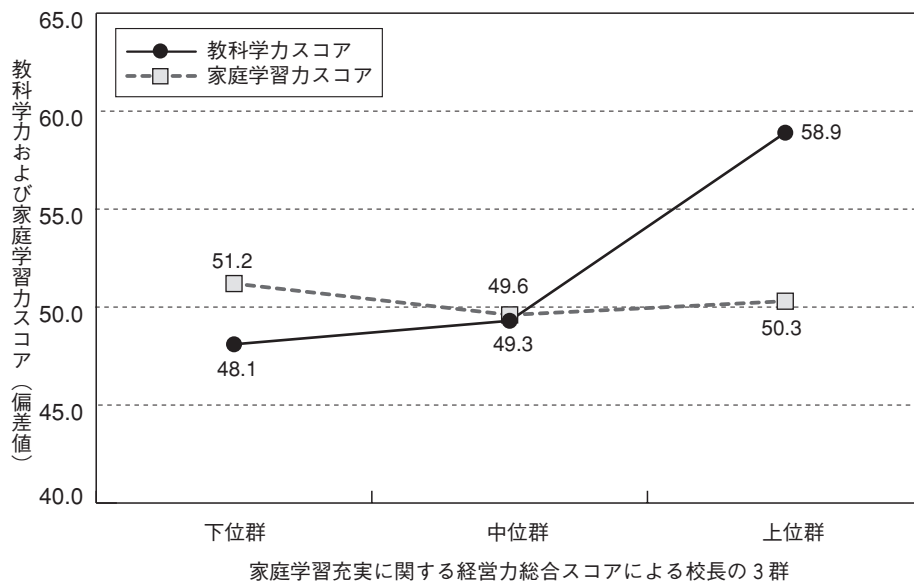


これらの図表からは、校長の家庭学習充実の経営力総合スコアが高い学校では子どもの教科学力スコアは高くなっており、「宿題を絡めた授業改善の遂行(E2)」「家庭との連携(M2)」「校内組織の連携・協働(O1)」といったカテゴリーに関する取り組みの影響度が大きいことが推察される。一方、家庭学習力スコアについては教科学力スコアと対照的な傾向が見られ、「校長の家庭学習充実の経営力が高いほど子どもの家庭学習力が高い」という当初の仮説に反するような結果となった。

こうした結果の明確な背景や理由については十分に分析・考察しきれていないが、下位群に分類された6つの小学校のデータを具体的に見てみると、ある小学校では子どもの教科学力および家庭学習力スコアは対象校全体で上位5位に位置づき、下位群の中では突出して高いことがわかった。また、同校においては、校長の家庭学習充実の経営力は対象校における下位3校に位置づく一方、教師の家庭学習指導力スコアは対象校中第1位と

なっている。なお、保護者の家庭学習支援力は平均並みであることから、同校の家庭学習力や教科学力の高さは教師の指導力によるところが極めて大きいことがうかがえる。限られたサンプルの中においては、こうしたケースが1件でも含まれることによって全体に対する影響が大きくなってしまふことは避けられず、実際にはこうした校長の経営力が十分に発揮されていないでも教師の頑張りで一定の成果をあげている学校は少なからず存在する。しかし、それで満足することなく次なる目標に向かっていくためには、やはり校長の経営力は不可欠ではないだろうか。ちなみに同校のデータを除外し、校長の3群を分類し直すと、校長の経営力総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力の関係は**図表 3-3-9**のようになり、教科学力においては上位群>中位群>下位群となる傾向がより顕著となり、家庭学習力についても各群の差異はほとんど見られなくなることを付記しておく。

図表 3-3-9 例外的な学校 1 校を除外した場合の「家庭学習充実の経営力」総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係（小学校）



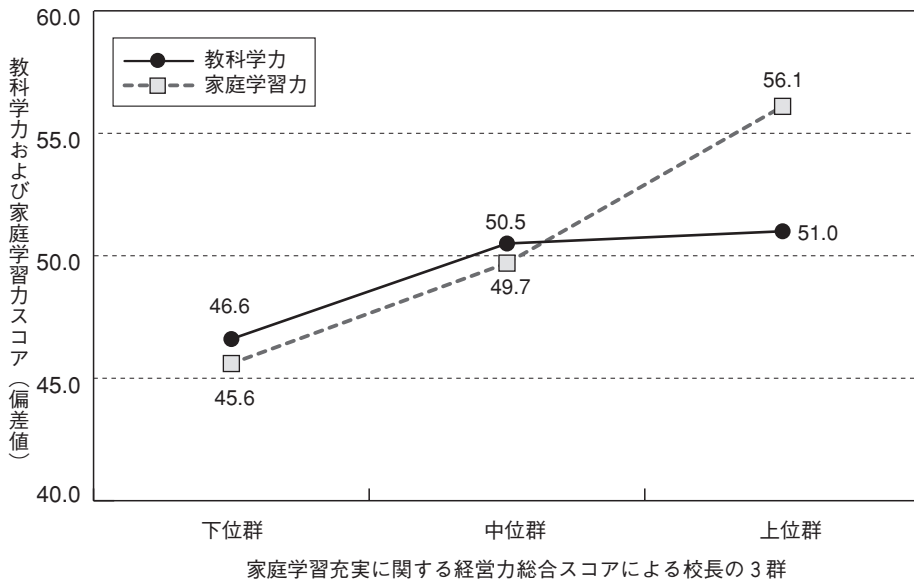
なお、図表 3-3-10 および図表 3-3-11 には、小学校に準ずるかたちで中学校における校長の家庭学習充実の経営力と子どもの教科学力および家庭学習力の関係を示した。中学校においては校長の経営力と子どもの教科学力および家庭学

習力との間にともに正の相関関係が認められる。また、とりわけ家庭学習力に対する影響度が強くなる傾向が見受けられ、校長の経営力の中でも「総合的なカリキュラム編成（E1）」の寄与度が高いことが読み取れる。

図表 3-3-10 「家庭学習充実の経営力」の 카테고리別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係（中学校）

「家庭学習充実の経営力」の 카테고리	校長群 子どもスコア	家庭学習 MORE	家庭学習 MORE	家庭学習 MORE	上位-下位	検定
		下位群	中位群	上位群		
1. 家庭学習推進の基盤構築 (M1)	教科学力	48.9	49.4	52.7	3.8	
	家庭学習力	51.0	49.2	51.6	0.6	
2. 家庭との連携 (M2)	教科学力	52.5	47.9	55.5	3.0	
	家庭学習力	53.6	48.3	52.3	-1.3	
3. 校長の手腕 (M3)	教科学力	50.8	49.8	49.7	-1.0	
	家庭学習力	45.8	50.6	53.7	7.9	
4. 授業改善の推進 (M4)	教科学力	49.0	50.5	47.3	-1.7	
	家庭学習力	46.6	50.4	49.8	3.2	
5. 校内組織の連携・協働 (O1)	教科学力	51.5	50.0	48.7	-2.8	
	家庭学習力	54.9	49.0	51.3	-3.6	
6. 小・中学校間の連携 (O2)	教科学力	53.4	49.2	45.5	-7.9	
	家庭学習力	50.7	50.4	47.2	-3.5	
7. 総合的なカリキュラム編成 (E1)	教科学力	48.5	49.6	53.2	4.6	
	家庭学習力	46.2	48.9	58.4	12.2	+
8. 宿題を絡めた授業改善の遂行 (E2)	教科学力	48.8	50.3	49.8	1.0	
	家庭学習力	47.4	50.9	48.7	1.3	
家庭学習充実への経営力総合スコア	教科学力	46.6	50.5	51.0	4.3	
	家庭学習力	45.6	49.7	56.1	10.5	+

図表 3-3-11 「家庭学習充実の経営力」総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係（中学校）



3 教科学力の違いを家庭学習充実の経営力発揮の観点から探る

さて、先に本節1項で中学校における校長の家庭学習充実に関する取り組みにおいて、子どもの教科学力や家庭学習力スコアが「否定群>肯定群」となる項目が複数あることを見た。ただ、家庭学習充実に関する校長の積極的な取り組みが子どもの教科学力や家庭学習力をかえって低下させているとは考え難く、図表3-3-11に示すように、校長の家庭学習充実に関する経営力総合スコアで見ると、教科学力や家庭学習力との間には正の相関関係が認められる。

そこで、視点を変えて、一つひとつの取り組みではなく、新たに構築した8つのカテゴリースコアに沿って教科学力の高い中学校と低い中学校では校長の家庭学習充実の取り組みにどのような違いがあるのかを探ることとし、本章第1節に準じて図表3-3-12および図表3-3-13に各カテゴリースコアの対比表とそのレーダーチャートを示した。なお、対比表やレーダーチャートの

作成手順は本章第1節の該当部分を参照されたい。

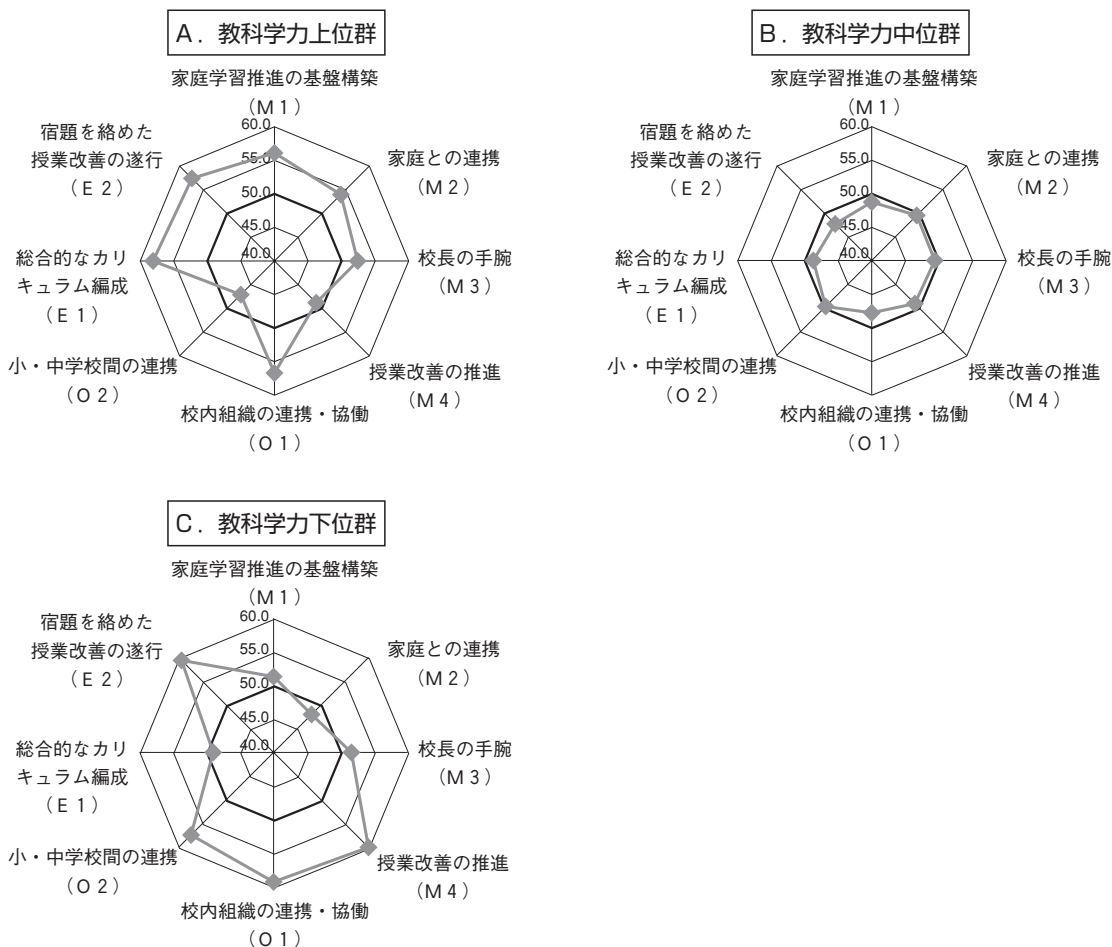
まずA. 教科学力上位群について見てみると、「M4. 授業改善の推進」および「O2. 小・中学校間の連携」を除き、どのカテゴリーにおいても基準値50を大きく超え、特に「E1. 総合的なカリキュラム編成」や「E2. 宿題を絡めた授業改善の遂行」といったMOREモデルの「教育課程の整備・充実(E)」での取り組みの高さが目立つ。上位群における今後のテーマは恐らく「M4. 授業改善の推進」および「O2. 小・中学校間の連携」となっていくであろう。

次に、B. 教科学力中位群を見ると、すべてのカテゴリーで基準値50を若干下回るものの、ほぼ平均レベルとなっており、バランスの大きな崩れがない点が特徴といえる。逆に言えば、特徴的な取り組みがなされておらず、現状のブレークスルーとなる決め手を欠いているともいえよう。

図表 3-3-12 教科学力の3群で見た校長の家庭学習充実の経営力の違い（中学校）

家庭学習充実の経営力カテゴリー	A. 教科学力上位群	B. 教科学力中位群	C. 教科学力下位群	A-C
M1. 家庭学習推進の基盤構築	56.1	48.7	51.3	4.7
M2. 家庭との連携	54.0	49.5	48.0	6.0
M3. 校長の手腕	52.4	49.4	51.6	0.8
M4. 授業改善の推進	48.8	49.1	60.0	-11.2
O1. 校内組織の連携・協働	56.7	47.8	59.3	-2.6
O2. 小・中学校間の連携	47.1	49.7	57.4	-10.3
E1. 総合的なカリキュラム編成	58.1	48.7	49.0	9.0
E2. 宿題を絡めた授業改善の遂行	57.4	47.7	59.4	-2.1
家庭学習MORE総合	55.6	48.3	56.3	-0.7

図表 3-3-13 教科学力3群における家庭学習充実の経営力カテゴリースコアのレーダーチャート（中学校）



次に、C. 教科学力下位群についてみると、家庭学習MORE総合スコアではA. 教科学力上位群よりも高くなっている。しかし、各カテゴリースコアでは大きなバラつきが見られ、「M4. 授業改善の推進」「E2. 宿題を絡めた授業改善の遂行」「O1. 校内組織の連携・協働」および「O2. 小・中学校間の連携」では極めてスコアが高い一方で、「M1. 家庭学習推進の基盤構築」「M2. 家庭との連携」「M3. 校長の手腕」といった「基本方針の設定と共通理解の促進(M)」や「E1. 総合的なカリキュラム編成」といった取り組みが相対的に低いことがわかる。

さて、C. 教科学力下位群に属する学校(3校)を個別に見てみると、校長の経営力はいずれも高く、校長の経営力のカテゴリーの一つである「M3. 校長の手腕」に関するスコアやリーダーシップの発揮状況も高いが、教師の家庭学習指導力もしくは保護者の家庭学習支援力のどちらかが極端に低いことがわかった。つまり、教科学力下位群における子どもの教科学力や家庭学習力の低さは、校長の経営力に起因するというよりも、むしろ直接的な影響力を及ぼす教師の指導力や保護者の家庭学習支援力の低さに起因することを示唆していると考えてもよさそうである。

このようなことを踏まえると、「課題を抱えるいくつかの中学校においては、校長の強いリーダーシップを中心とした教師の指導力向上や保護者の家庭学習支援力の向上の動きが始まっているが、その成果はまだ子どもたちの教科学力や家庭学習力には明確には現れていない」という本節第1項で述べた仮説はより妥当性が強まってくる。

ここで、改めてA. 教科学力上位群とC. 教科学力下位群の状況を比較すると、両群の大きな違いは「E1. 総合的なカリキュラム編成(A>C)」 「M4. 授業改善の推進(C>A)」および「O2. 小・中学校間の連携(C>A)」の3つのカテゴリーとなっており、両者は家庭学習MORE総合スコアでは大きな差はないが、カテゴリーベースで見るとかなり対照的な取り組みがなされていることが読み取れる。また、本節第1項で見た中学校

における校長の家庭学習充実の取り組みで、教科学力や家庭学習力のスコアが大きく否定群>肯定群となった項目(問6-13、問6-14、問6-15、問7-5、問7-7)は、ここで見てきたC. 教科学力下位群において突出して高い「M4. 授業改善の推進」「O1. 校内組織の連携・協働」および「O2. 小・中学校間の連携」といったカテゴリーの項目と合致することがわかる。

ただ、仮に先の仮説に従えば、上位群と下位群における対照的ともいえる取り組みの違いが、子どもの教科学力や家庭学習力の違いとなって現れているというよりも、C. 教科学力下位群においては、教師の指導力や保護者の家庭学習支援力における課題を解決するために、リーダーシップや経営力の高い校長が「M4. 授業改善の推進」「O1. 校内組織の連携・協働」「O2. 小・中学校間の連携」および「E2. 宿題を絡めた授業改善の遂行」といったテーマを優先課題として設定し、学校改革に向けて積極的に取り組みははじめているというように解釈することも可能となる。

本稿では、そうした取り組みを行うに至った背景や、果たして子どもの教科学力や家庭学習力の育成・向上にどのようなつながっていくのかといった部分までは立ち入ることができず、今後の課題として残されたが、今回のデータを読み解く上での一つの視点を見出すことはできたと考える。

なお、図表3-3-11において校長の経営力総合スコアで下位群となった学校の子どもの教科学力および家庭学習力が3群中最も低くなること、逆の観点からみた図表3-3-13における教科学力下位群において校長の経営力総合スコアが最も高くなることに矛盾を感じられる向きもあるが、上位群・下位群の構成比率がともに約15%と極端なケースを抽出していることから学校単位で見ると両者は一切合致しておらず、データ上に矛盾はないことを付記しておく。ただ、その一方で、上位群・下位群ともにより一般的なケースにおける傾向が見えにくくなっている点もあわせて述べておく。

家庭学習充実の経営力の発揮状況から見た教師の家庭学習指導力と保護者の家庭学習支援力の違いについて

以上、校長の家庭学習充実の経営力と、子どもの教科学力および家庭学習力の関係について見てきた。校長の家庭学習充実の経営力総合スコアで見ると限りにおいては、小・中学校ともに子どもの教科学力に対しては、ある程度の正の相関関係が認められた。ただ、校長の家庭学習充実の取り組みや働きかけが直接的に子どもの教科学力に影響を及ぼしているというよりも、それらの取り組みや働きかけによる教師の家庭学習指導力や保護者の家庭学習支援力の向上を介した間接的な影響によるものとするのが妥当であることは前にも述べた。そして、それが今回の「基本調査2008」における作業仮説5および6を設定する上での背景となっている。

そこで、次に、校長の家庭学習充実の経営力と教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支

援力との関係について見ていくことにする。

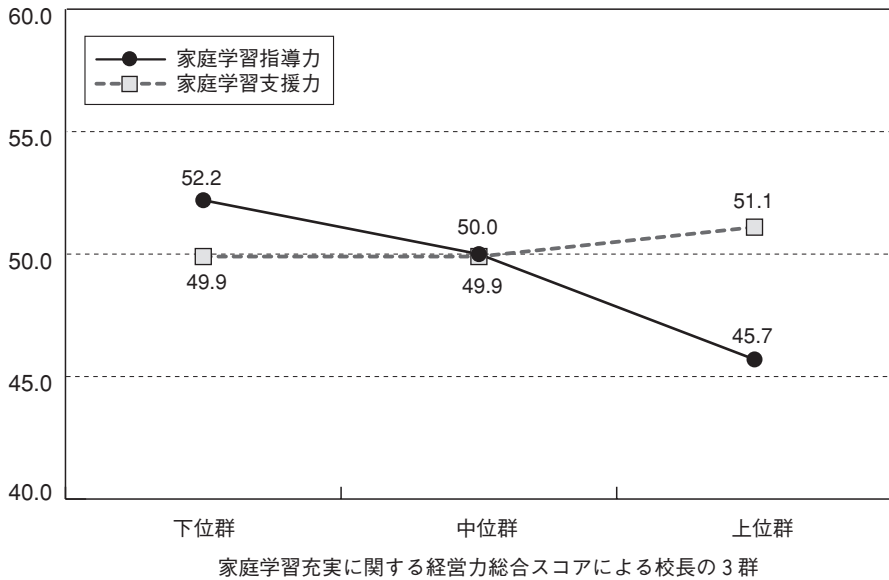
図表3-3-14は、前項で見てきた校長の家庭学習充実の経営力の8つのカテゴリースコアについて、小学校校長を3群に分類し、各群の校長の勤務する学校に属する教師の家庭学習指導力の平均スコア(偏差値換算)ならびに保護者の家庭学習支援力の平均スコア(偏差値換算)を表している。また、図表3-3-15では、各群の校長の家庭学習充実の経営力総合スコアと教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力の関係(図表3-3-14の最下部)をグラフに表した。

なお、前述してきたように教師、校長におけるそれぞれの教育力のカテゴリーの再編に伴う集計単位の変更等により、「基本調査2008」中間報告書に示した同種の図表とは数値が異なっていることを改めて述べておく。

図表3-3-14 「家庭学習充実の経営力」のカテゴリー別スコアと教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力との関係(小学校)

家庭学習充実の経営力の カテゴリー	校長群 教師、 保護者スコア	家庭学習	家庭学習	家庭学習	上位-下位	検定
		MORE 下位群	MORE 中位群	MORE 上位群		
1. 家庭学習推進の基盤 構築(M1)	家庭学習指導力	45.7	50.5	51.4	5.7	
	家庭学習支援力	44.1	51.3	50.1	6.0	
2. 家庭との連携(M2)	家庭学習指導力	50.5	50.0	49.6	-0.9	
	家庭学習支援力	46.2	50.6	50.8	4.7	
3. 校長の手腕(M3)	家庭学習指導力	52.9	50.4	45.1	-7.8	
	家庭学習支援力	46.8	51.0	48.3	1.5	
4. 授業改善の推進 (M4)	家庭学習指導力	52.5	49.7	47.8	-4.8	
	家庭学習支援力	49.7	49.4	54.3	4.6	
5. 校内組織の連携・協働 (O1)	家庭学習指導力	46.8	51.7	46.6	-0.1	
	家庭学習支援力	49.9	49.4	52.9	3.0	
6. 小・中学校間の連携 (O2)	家庭学習指導力	51.2	51.1	43.0	-8.1	
	家庭学習支援力	53.1	47.6	50.6	-2.6	
7. 総合的なカリキュラム 編成(E1)	家庭学習指導力	50.9	50.6	47.4	-3.5	
	家庭学習支援力	50.8	49.2	51.2	0.4	
8. 宿題を絡めた授業改善 の遂行(E2)	家庭学習指導力	51.8	50.1	46.1	-5.7	
	家庭学習支援力	47.0	50.6	50.7	3.6	
家庭学習充実への経営力 総合スコア	家庭学習指導力	52.2	50.0	45.7	-6.4	
	家庭学習支援力	49.9	49.9	51.1	1.2	

図表 3-3-15 「家庭学習充実の経営力」総合スコアと教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力との関係（小学校）



これらの図表からは、小学校においては「校長の家庭学習指導力が高い学校ほど教師の家庭学習指導力が低い」という当初の作業仮説5と相反する結果が読み取れる。特に、「小・中学校間の連携（O2）」や「校長の手腕（M3）」、「宿題を絡めた授業改善の遂行（E2）」といったカテゴリーに関する取り組みにおいてその傾向が顕著となっている。なお、保護者の家庭学習支援力に関しては、各群間に大きな差異は見られず作業仮説5の検証は見送られた。

さて、この現象をどう解釈すればよいのであろうか。常識的に判断すれば、校長のそうした取り組みや働きかけが教師の指導力にマイナスの影響を及ぼすというのは考えにくい。

そこで、ケーススタディ的に家庭学習充実の経営力で上位群となった学校のうち特徴的な2校について個別に見てみたところ、A校では校長の経営力は他校を大きく引き離し対象校中第1位となっている一方で、教師の家庭学習指導力は平均を大きく下回ることが確認できた。また、保護者の家庭学習支援力は校長の経営力と同様、他校を大きく引き離し対象校中第1位となっており、子どもの教科学力や家庭学習力に関しても対象校中のトップクラスとなっている。

さらに詳しく同校のプロフィールを探ってみると、保護者の学校の取り組みに対する評価や満足度は低く、子どもの通塾（特に進学塾）率は全体

平均を大きく上回っている状況が確認できた。なお、校長の自由記述によれば、前任校での実践成果を踏まえつつ教師の指導力向上を最重点課題として精力的に取り組んでいることがわかる。これらのことを勘案すると同校における子どもたちの高い教科学力や家庭学習力は、家庭の教育力や校外の教育力によるものが大きいと解釈でき、その状況を打破すべく奮闘している校長の姿が浮かんでくる。

また、B校では、教師の指導力、保護者の支援力、そして子どもの教科学力・家庭学習力がともに平均を大きく下回り、校長の家庭学習充実の経営力のみが突出している。着任2年目の校長の自由記述からは、これまでの体験型学習中心であった学習指導の在り方を見直すとともに、不十分であった家庭との連携を強化し、基礎・基本の徹底を図る取り組みへの着手がなされつつある状況がうかがえる。

さて、筆者はここ数年多くの教育委員会や学校現場を訪問し、先生方と話をすることがあり、この2、3年の間に校長の学力向上に関わる学校経営の取り組みに大きな変化が起こっていると感じている。いわゆる「全国学力調査」が実施され、教育委員会や各学校に対してその結果が厳然と示され、保護者をはじめ地域住民においても学校教育の格差に対する大きな関心が高まる中、「教師の資質・能力の向上」とともに「校長の学校経営

手腕の発揮」はより一層求められている。そうした状況の中で、教育委員会の強い後押しを受けるかたちで、とりわけ学力調査結果が芳しくない学校において学力向上に向けた学校を挙げての取り組みが、家庭の教育力向上支援を含めて活発化しているという話を聞くことが少なからずある。言い換えれば、そうした学校に対して強力なリーダーシップを有する校長を新たに配置し、教師の指導力の向上や保護者の家庭学習支援力の育成向上を積極的に図っていく動きが中心に始まっているというのである。

また、「基本調査2004」の知見に基づき開発した弊社の「総合教育力調査」に関するここ2、3年の複数自治体での実施結果を見ても、「子どもの総合学力があまり芳しくない学校において校長の学校経営力スコアが高い」といったこれまでの調査データとは異なる結果が出る傾向が見受けられる。

こうした限られたケースからは断定できないものの、前項で見た中学校における現象と同様、図表3-3-15に現れた現象は、「教師の指導力や家庭の教育力に何らかの課題がみられる学校に対して、経営力の高い校長が配置され、課題解決に向けて取り組んでいる過渡的な状況」を示したものと解釈できないだろうか。さらに、本調査の協力校は自主的参加が原則であり、校長や研究主任のリーダーシップが相対的に強く、これまでの取り組みの成果の検証や新たな課題の発見、教師の意識付けといった目的で参加されるケースが大半であることも、こうした推測を支持するものとなっている。もちろん、これらは推測にすぎず、より詳細な情報収集や今後の継続的な調査を通して確認していく必要があることは言うまでもない。

なお、図表3-3-16および図表3-3-17には、小学校に準じて中学校における校長の家庭学習充実の経営力と教師の家庭学習指導力並びに保護者の家庭学習支援力との関係を示した。

中学校においては、有意な差異は認められなかつ

たものの、教師の家庭学習指導力においては家庭学習充実の経営力との間に正の相関関係が見受けられ、「M3. 校長の手腕」が大きな影響を及ぼしていることが推察できる。

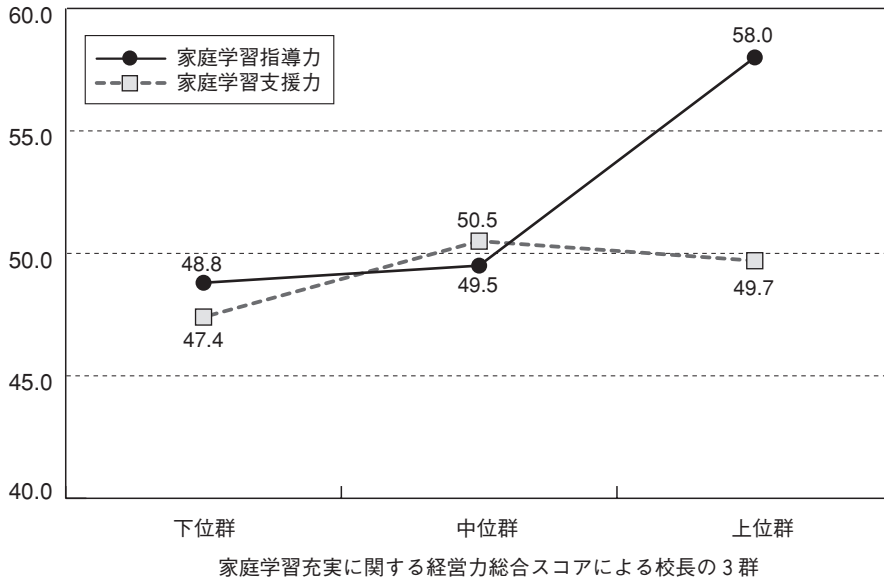
さて、前項で見てきたように、子どもの教科学力や家庭学習力が特に芳しくない中学校ではその改善を目指すかたちで校長の強い経営力が発揮されているケースが確認され、その背景には教師の指導力や保護者の家庭学習支援力を向上させることによって、子どもの教科学力や家庭学習力の向上を目指そうとする校長の取り組みがあるという仮説を導いてきた。

そうであれば、図表3-3-17における校長の家庭学習充実の経営力上位群においては、教師の家庭学習指導力はこれほど高くなるであろうかという疑問が出てくる。そこで、家庭学習充実の経営力上位群に属する学校について個別に見ていくと、5校中2校で教師の家庭学習指導力が平均を大きく下回る(偏差値で43程度)ことが確認できた。その一方で、偏差値で80超となる学校が確認でき、その学校が大きくスコアを押し上げていることがわかった。ちなみにその学校を除外すると教師の家庭学習指導力スコアの平均は偏差値で48程度となり、先の仮説とは矛盾しない。このように、家庭学習充実の経営力上位群に属する学校においては、校長の経営力が教師の指導力や保護者の家庭学習支援力を向上させ、その結果として子どもの教科学力や家庭学習力の高まりが見られる成熟型のケースと、校長の強力な経営力によってこれまであまり高くなかった教師の指導力や保護者の家庭学習支援力を向上させていこうとする途上型のケースが混じり合っているものと考えられる。図表3-3-17のスコアはその平均となっており、個別に見るとバラつきが大きいことに注意する必要があるだろう。ちなみに、下位群においては、バラつきは上位群の半分以下となり、教師の家庭学習指導力ならびに保護者の家庭学習支援力は押し並べて低いことを付け加えておく。

図表 3-3-16 「家庭学習充実の経営力」の 카테고리別スコアと教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力との関係（中学校）

家庭学習充実の経営力の カテゴリー	校長群 教師、 保護者スコア	家庭学習	家庭学習	家庭学習	上位-下位	検定
		MORE 下位群	MORE 中位群	MORE 上位群		
1. 家庭学習推進の基盤 構築（M1）	家庭学習指導力	51.9	49.3	56.8	4.9	
	家庭学習支援力	52.3	50.0	48.3	-3.9	
2. 家庭との連携（M2）	家庭学習指導力	56.1	48.1	56.1	0.0	
	家庭学習支援力	51.2	50.0	48.5	-2.7	
3. 校長の手腕（M3）	家庭学習指導力	50.5	48.6	64.9	14.4	+
	家庭学習支援力	48.7	52.6	32.9	-15.7	+
4. 授業改善の推進 （M4）	家庭学習指導力	48.5	50.9	50.1	1.6	
	家庭学習支援力	48.5	50.2	50.5	2.1	
5. 校内組織の連携・協働 （O1）	家庭学習指導力	51.3	50.6	49.6	-1.7	
	家庭学習支援力	51.0	49.0	54.8	3.8	
6. 小・中学校間の連携 （O2）	家庭学習指導力	51.6	48.0	56.1	4.5	
	家庭学習支援力	50.7	50.5	47.8	-2.9	
7. 総合的なカリキュラム 編成（E1）	家庭学習指導力	46.0	51.2	52.2	6.2	
	家庭学習支援力	48.2	49.9	52.3	4.1	
8. 宿題を絡めた授業改善 の遂行（E2）	家庭学習指導力	47.5	51.3	51.0	3.5	
	家庭学習支援力	49.2	50.0	51.4	2.3	
家庭学習充実への経営力 総合スコア	家庭学習指導力	48.8	49.5	58.0	9.2	
	家庭学習支援力	47.4	50.5	49.7	2.3	

図表 3-3-17 「家庭学習充実の経営力」総合スコアと教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力との関係（中学校）



2 教師の家庭学習指導力の違いを校長の経営力発揮の観点からさぐる

以上、校長の家庭学習充実の経営力と教師の家庭学習指導力や保護者の家庭学習支援力の関係について見てきたが、今回の結果からは必ずしも「校長の家庭学習充実の経営力が教師の家庭学習指導力や保護者の家庭学習支援力を向上させる」という作業仮説5、6を明確に検証できるまでには至らなかった。その大きな理由としては、繰り返しになるが、教師の指導力や家庭の教育力に何らかの課題がみられる学校に対して、経営力の高

い校長を配置し、課題解決に向けて取り組んでいくとするここ数年来の学校教育現場の動向を受け、その過渡的な状況が今回のデータにも反映されているものと考えられる。

最後に、視点を変えて、教師の家庭学習指導力が高い学校とそうでない学校では、校長の家庭学習充実の経営力にどのような違いがあるのかを探ってみたい。

図表 3-3-18 教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力の3群で見た校長の家庭学習充実の経営力の違い (小学校)

家庭学習充実の経営力カテゴリー	(1) 教師の家庭学習指導力			(2) 保護者の家庭学習支援力		
	A. 上位群	B. 中位群	C. 下位群	A. 上位群	B. 中位群	C. 下位群
M1. 家庭学習推進の基盤構築	53.8	49.1	49.7	53.4	49.4	49.1
M2. 家庭との連携	53.4	49.0	50.5	59.3	48.1	49.2
M3. 校長の手腕	50.0	49.9	50.4	54.8	48.6	52.8
M4. 授業改善の推進	47.1	50.2	52.6	55.3	48.9	49.9
O1. 校内組織の連携・協働	51.2	49.8	49.6	53.5	49.1	50.0
O2. 小・中学校間の連携	49.5	49.3	54.0	50.9	49.0	54.9
E1. 総合的なカリキュラム編成	48.7	50.6	48.7	53.0	49.2	49.3
E2. 宿題を絡めた授業改善の遂行	47.0	50.5	51.3	53.5	49.3	49.6
家庭学習MORE総合	50.3	49.8	50.7	55.3	48.7	50.5

図表 3-3-18 には、小学校における教師の家庭学習指導力ならびに保護者の家庭学習支援力を本節第2項の図表 3-3-12 に準ずるかたちで、各々3群に分類し、各群における校長の家庭学習充実の経営力スコアを示した。また、図表 3-3-19 では、各群における状況をレーダーチャートとして視覚化した。

まず、教師の家庭学習指導力のA. 上位群について見ると、「M1. 家庭学習推進の基盤構築」「M2. 家庭との連携」「O1. 校内組織の連携・協働」といったカテゴリーで基準値50を上回る一方、「M4. 授業改善の推進」および「E2. 宿題

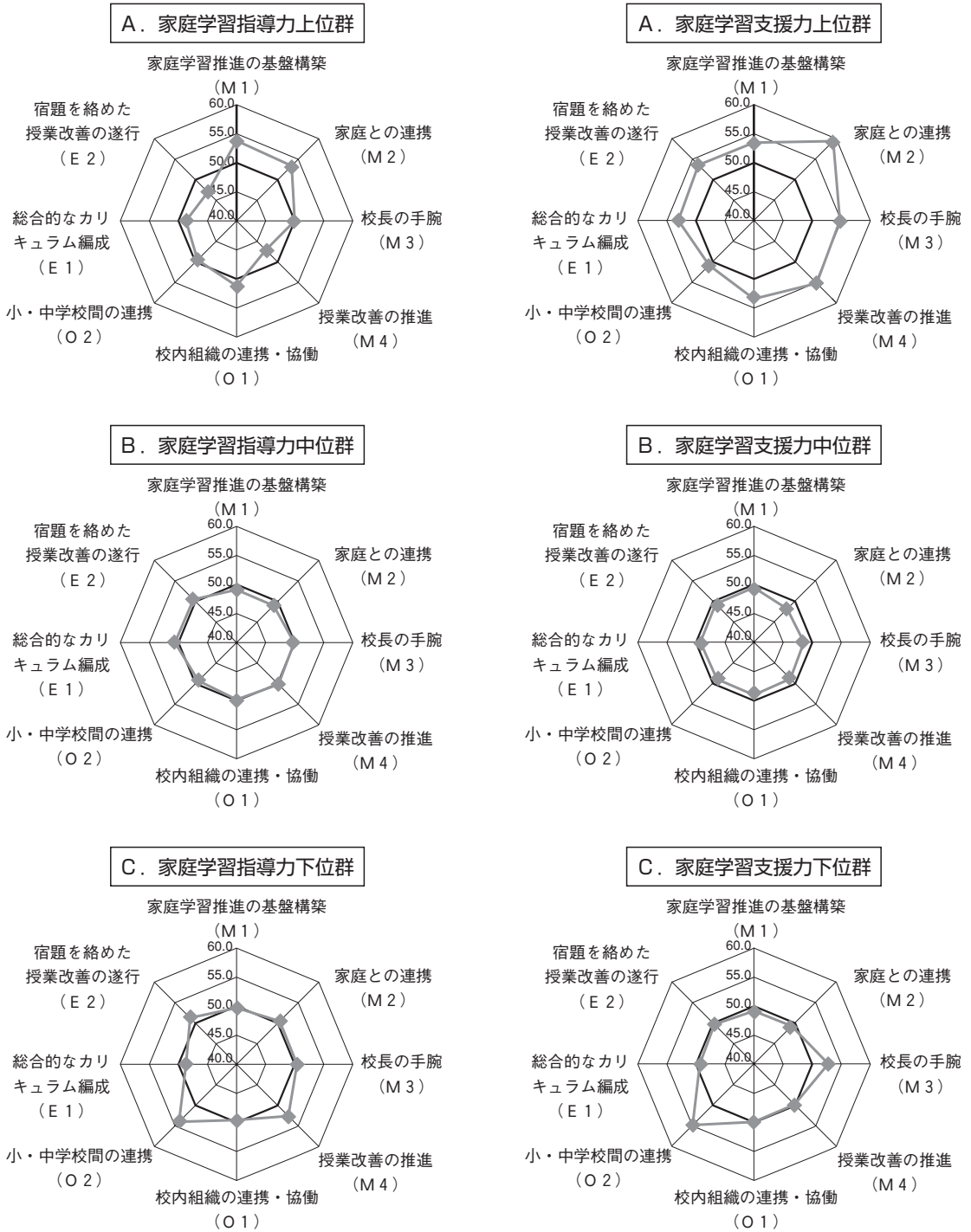
を絡めた授業改善の遂行」では基準値50を下回り、カテゴリーによって経営力の発揮状況にバラつきがうかがえる。ただ、他の群に比べると「M1. 家庭学習推進の基盤構築」「M2. 家庭との連携」が相対的に高く、これらが教師の家庭学習指導力を支えているものと推察される。

次に、B. 中位群について見ると、どのカテゴリーも基準値50前後となり、平均的な状況となっており、図表 3-3-13 でも述べたように、特徴的な取り組みがなされておらず、教師の指導力を大きく向上させていく決め手を欠いている状態といえよう。

図表3-3-19 教師の家庭学習指導力および保護者の家庭学習支援力の3群における校長の家庭学習充実の経営力カテゴリースコアのレーダーチャート(小学校)

1) 教師の家庭学習指導力

2) 保護者の家庭学習支援力



さて、C. 下位群においては、先のB. 中位群とさほど大きな違いは見られないが、「M4. 授業改善の推進」「O2. 小・中学校間の連携」といった取り組みで基準値50を超えており、これまでの仮説に従えば、それらの取り組みに重点を置くことで教師の家庭学習指導力の向上を目指そうとする校長の姿が見えてくるのではないだろうか。

次に、保護者の家庭学習支援力について見てみると、B. 中位群やC. 下位群では、先の教師の家庭学習指導力で見たのとほぼ同様の傾向が見られるが、A. 上位群ではかなり特徴的な状況がうかがえる。つまり、「O2. 小・中学校間の連携」を除いていずれも基準値50をかなり上回り、バランスのとれた取り組みがなされていることがわかる。その中でもとりわけ「M2. 家庭との連携」に関する取り組みの高さが顕著になっており、そうした取り組みが保護者の家庭学習支援力を高めているものと推察できる。

このように見ていくと、校長の家庭学習充実の経営力は教師の指導力や保護者の支援力に少な

らず影響を及ぼしていることがわかる。しかし、第2章6節でも述べているように、校長の家庭学習充実に向けての具体的な取り組みはまだ始まったばかりであり、全体的に見ても今後に向けて取り組みの余地は大きい。また、ここでは校長の経営力が教師の指導力や保護者の支援力を高めるという観点からの解釈が中心となったが、教師の指導力や保護者の支援力および子どもの教育に対する意識や期待が高いがゆえに、校長の経営力が十分に発揮できるという側面も当然あり、学校を取り巻く諸環境や実態といった要因も考慮する必要がある。

いずれにせよ、子どもの総合学力の育成・向上には、校長、教師、保護者が単独でなしうるものではなく、共通の方向性・基盤に立ち、それぞれの役割や責任を共通理解した上で、その役割を遂行し、かつ連携・協働することが求められていることは間違いなからう。次節では、そうした三者のパートナーシップの重要性についてデータから探ってみたい。